



# 13 億 人 の 夢

おおさき かなこ  
大崎 佳奈子

在中華人民共和国日本国大使館・經濟部

初めて訪れた13年前から比べると、現在の北京はまるで別の都市のようである。バスや地下鉄はちゃんと並んで乗るし（整列担当者が目を光らせているからかも？）、スターバックスコーヒーやコンビニが街の至る所にありとても便利になった。オリンピック期間中は市内で青空が見え、花や緑が増えて路上のゴミは激減し、とてもきれいな街になった。

連合、そして出身労組であるJ P 労組の推薦をいただき、在中国日本大使館に着任しはや4ヶ月。毎日が本当にあっという間に過ぎ去っていく。着任早々、四川省で大地震が発生した。3日間行われた全国哀悼日では全国で半旗を掲げた。赤い色が大好きな中国で各種新聞は一斉に黒一色になり、テレビのどのチャンネルも人民解放軍が人々を救出する場面が終日映し出された。そして8月は毎日朝から晩までオリンピック関連番組が放送された。

オリンピック開催中は街の至る所に五輪旗、5匹のマスコットそして五星紅旗がはためいた。まるで街中が胸を張り、誇りに満ちているようだった。「オリンピックが終わっちゃったらみんながっかりしないの？」とタクシー運転手に聞いても、そんなことは余計な心配らしい。北京はどんどん良くなるし、オリンピックを観に来た世界中の人々に中国、北京を見て知ってもらいたいと願っているようだ。その自信、日本人にも少し分けても

らいたい。

オリンピックの開催に伴い、歴史の街北京にも新しい建物がたくさん増えた。オリンピックスタジアム（鳥の巣）、数々の世界記録を生み出した国家水泳センター（水立方）、中央電視台の新社屋は未完成ながらも斬新で倒れそうなデザインだ。

これら北京の新名所を実際に建てたのは出稼ぎの農民たちがほとんどだ。私が見た彼らは建設現場近くの掘っ立て小屋で2段ベッドがひしめく中で暮らしていた。オリンピックに間に合わせるため昼も夜も関係なく働く彼らの給料はどれくらいだったのだろうか？ 仕事明けがをしたらどうなったのだろうか？ 13億人の夢、オリンピックを支えたのは、実は出稼ぎ農民であったと私には思えてならない。

中国には2億2,600万人の出稼ぎ労働者がいると言われている。中国人が6人いたらそのうち1人は出稼ぎ労働者という計算だ。あまりにも多い。オリンピック閉幕直後に中国内陸部の甘肅省を訪れた。農民の主な収入源は農業、牧畜業そして出稼ぎである。年収1,200元（約18,000円）ほどの村で出稼ぎは現金を得るための貴重な手段だ。そして都市部では彼らは欠かすことの出来ない労働力だ。

中国では今年に入ってから労働者に有利な3つの法律が相次いで施行された。労働契約法、就業



---

促進法、労働紛争調停仲裁法である。中でも中国進出企業の一番の関心は今年1月1日に発効した「労働契約法」だ。法律案に対し史上最多のパブリックコメントが出され話題となった。この法律の大きなポイントは、労働契約を3回更新すると終身雇用が規定されるようになること、自主退職を除き解雇された場合は経済補償金（退職手当）を使用者側に請求できるようになること、派遣労働を補助的な仕事と定義し派遣元は2年以上の労働契約を結ばなければならないことなどだ。弱い労働者の立場に立った画期的な法律と言えるが、不明瞭な部分が多数あり、今後この法律がどのように運用されるかはまだわかりにくい。一方、人件費を少しでも抑えたい企業にとっては悩ましい法律であろう。

また、労働争議調停仲裁法が施行されてから、労働者は今までよりも簡単に自己負担なしで労働争議の仲裁を仲裁委員会に申し立てられるようになった。このため、特に華南地区では仲裁申し立て数が激増している。

そして具体的に出稼ぎ労働者を支援する動きも目立ってきた。省庁再編で新しくできた人力資源社会保障部（大まかに言えば日本の人事院+厚生労働省に相当）には出稼ぎ農民を専門に担当する「農民工工作司（出稼ぎ農民対策局）」が設置された。出稼ぎ労働者の待遇は非常に悪く、農民ということだけで都市であらゆる社会保障が受けら

れず、多くが差別待遇を受けている。パラリンピックが終わり、出稼ぎ労働者が北京に戻ってきたら、賃金不払い、突然の解雇、危険な労働条件など彼らを取り巻く問題が解決されることを心から望み、出稼ぎ労働者が少しでも人間らしいまともな生活ができる社会になってほしい。

経済発展の光と影、都市と農村、圧倒的富裕層と圧倒的貧困層。13億人は本当に多様である。北京オリンピックのテーマは「一つの世界、一つの夢」だったが、ここには「13億の異なる世界、13億の異なる夢」があると思う。私が北京で見ている世界はほんの一部だ。甘粛省では雨が降り泥と化した黄土高原で四川大地震でひびが入った危険指定の校舎を見た。でもそんな中で懸命に勉強する子どもたちにも様々な夢があった。

着任直後、長年来の北京の友人を訪問して彼女に勧められたのは「换位思考」と「多層次交流」だった。「换位思考」は、相手の立場に立って考えること、いろいろな中国人の考え方を知ること、そして「多層次交流」はいろいろな人たちと交流すること。トップレベルの人々と知り合うのもよいけれど、市場で買い物をし、北京の伝統的な胡同に暮らす市井の人たちの話にも耳を傾けなさいよ、というアドバイスだった。たった3年で何人と会えるかわからないけれど、多くの人と知り合って、彼らの世界を知りたい。